
misunderstand

季樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m i s u n d e r s t a n d

【Nコード】

N 4 0 7 3 A

【作者名】

季樹

【あらすじ】

3度目にして初デート。期待に胸膨らませるそんな時、電話が突然鳴り響いた。

[illegible]

午前8時、本日は日曜日、晴れ。

「うーっしやあ！」

大きく伸びをして、勢いよく起き上がる。今日は3度目にして初デート。今日こそ、今日こそは大丈夫だよな? デートに行けるよね?

待ち合わせは10時。支度は完璧、さあ出かけるぞ！っていうときに電話がかかってきた。春亜さんからだ。

「もしもし？ 四季くん？」

なんだか嫌な予感がする。いや、間違いないいい知らせじゃないと思う。だって、今から会うつていうのに電話なんて。

「どうしたの？寝坊しちゃったとか？待ち合わせの時間遅らせようか？」

きつとそんなことじゃないとわかってるのに、俺ってば、なに聞いてるんだろう。

「ううん、そうじゃなくてね、ごめん……熱出ちゃって。」

ああ、やっぱりだ。また今回もお流れだ。自然と声も暗くなっちゃうし。

「そう、熱があるなら仕方がないよ。」

「本当に、本当にごめんね。今度は絶対延期しないから。」

そうやって延期に延期して今日だったんですけど。なんて、思っても口には出さない。なんか、そういうのカッコ悪いし。

「じゃあ、また。」

あくまでも大人ぶって電話を切る。でも、すぐため息。

「はあ……また延期か。」

一度目は急な仕事が入ったからって延期した。二度目は確か、あれ

？この前も風邪ひいたとかなんとか言っていなかったっけ？

「それってさ、もしかして仮病だったりしてな。」

暇を持て余していたら、涼一から電話がかかってきた。金持ちの御曹司から飯に誘われたとなれば、ご馳走にならないわけにはいかない。だから、今ここにいるのだけど、涼一はパスタを口に運びながらそんなことを言う。

「なんで仮病だって言い切れるんだよ。」

「3回めだぜ、もう延期より中止したほうがいいんじゃないの？」
出た、その人をあざ笑うかのような、自分をさげすむ様な含み笑い。
涼一は悪いやつじゃないけど、その笑い方はなんとなく馴染めない。
それに、そういう笑い方するときは、決まって何か嫌な事があったときだ。

「なんかあったの？」

恐る恐る尋ねてみる。でも、涼一は笑っただけで何も言わない。

「そんなことより、本当に仮病だったらどうするんだ？お前避けられてんぞ。」

「え？」

「初めの”急な仕事”っていうのも怪しいかもな。」

今は涼一より俺のこと考えたほうがいいのかも。なんで、そうも悪い方、悪い方って考えが回るんだ。急に不安になってきた。

「俺……」

「行くんだろ？さっさと行って確認してこいよ。」

言いかけて、先に言われる。なんでもお見通しなのか。

「それじゃまたな！」

言われるがままに、俺は店を飛び出す。目指すは春亜さんのマンション。出会ったときに一度だけ送っていったことがあって……あれ以来顔を合わせてないんだっけ。

「って、行くのはいいけど、四季のやつ金払っていけよな。」

なんとなく勢いでここまで走ってきたけど、家にいなかったらどうしよう。それより、もっと最悪な事態がそこに待っていたりして考えていても仕方がない。ここまできたんだ、もう進むしかない。

——ピンポーン

すぐには出てこない。待つこと数秒、インターホンから春亜さんの声が聞こえた。それから、こっちが答えるより前に、驚いたような声で俺の名前を叫んだ。

「どうして？ どうしたの？」

春亜さんの顔はこっちは見えはないけど、声だけでもかなり動揺してるのがわかる。それに、思ったより元気そうだ。

「来ちゃまずかった？」

「そんなことない、けど。あ、ごめん、今開けるね。」

すぐにドアが開いて、中から春亜さんが顔をのぞかせた。玄関の下には下りてないみたいで、ドアに寄りかかっているみたい。

「ごめんね、こんな格好で。入って。」

春亜さんがちょっと照れたように言ったのを聞いて、改めて服装を見る。寝ていたのかな、パジャマではないけど、随分とラフな格好。

「元気そうだね。」

あまりにも元気そうだから、そんな言葉が思わず口をついて出た。俺がいきなり言ったから、春亜さん、向こう向いたまま立ち止まっちゃったし。あれ、……ちょっと俯いてる？

「嘘、ついてるとでも思った？」

うわ、なんか俺やばいこと言っちゃったかもしれない。春亜さんの声がなんか怖いし、怒らせたかな。

「いや、その、そうじゃなくて、その、なんか思ったより元気そうだったから……その……」

慌てて言い繕うにも言葉がでてこない。ますますやばい雰囲気だ。

「……ごめん。」

何を言おうかと迷っていたら、突然謝られた。俺、謝られるようなことしてないし、むしろ謝るのこっちだよな？

「熱があるって聞いてたのに、当の本人がこんなに元気じゃ疑いたくもなるよね。」

まだこっちを向かないままに、春亜さんは続ける。ああ、それで”ごめん”なのか。

「でも、さ。せっかく来てくれたのに、辛い顔とかできないよ?」振り返った春亜さんの目は、少しだけ潤んでいるようにも見えた。

「ごめん、俺、なんか余計気を使わせちゃったみたいだ。」

焦っていた自分が、疑った自分が、急に恥ずかしくなった。今更謝ったところで、後の祭りなんだけど。

「謝らなくてもいいよ。気を使ったのは確かだけどさ、嫌な気を使ったわけじゃないから。」

「嫌な気?」

「ふふっ、ま、そういうこと。」

なんだろう、ものすごく意味がわからない。だけど、怒っているみたいでもないし、笑ってるし、いいのかな。

「あ、えとじゃあ、俺帰るね。」

「え、何で?」

「何でって、ゆっくり休んでもらわないとだし……」

「大丈夫、おかげでだいぶ元気になってきたから。あがってって、ね。」

「あ、うん。」

言われるがままに部屋へと踏み入れる。春亜さん、随分と気分がいいみたいだ。

これは、デートとして換算してもいいのかな?

なんか俺、今すっげー幸せかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4073a/>

misunderstand

2011年1月2日02時49分発行